

D. H. LAWRENCE : 小説に現われた女性

(その3)

Women in Love を中心に

石 田 美 栄

I

ロレンスの小説に現われた女性その1では、ロレンスの自伝的小説 Sons and Lovers における、息子としての Paul の死すなわち、一人の男としての Paul の誕生、そして男として芸術家としてのロレンス自身の誕生をみてきた。そこに現われた三人の女性 Mrs. Morel, Miriam, Clara はいずれも Paul の成長過程における必要物として存在し、Paul を成人させるために各々別々の役割を果たした。

そして次に、ロレンスの小説に現われた女性その2では、「人間にとって偉大な関係は男女の関係である」という主題に従って、両性関係の理想的状態を追求してゆくにふさわしい女性の誕生を The Rainbow において試みていることをみてきた。Brangwen 家の三代に渡る両性関係を描き、Lydia, Anna, Ursula と女性解放の三代記を通して、新しい女性 Ursula が生まれた。

Sons and Lovers は Paul の新しい出発 “He walked towards the faintly humming, glowing town quickly” で終り、そして The Rainbow は Ursula が大空に掛る虹を見ることによって表わされる、新しい Ursula の誕生すなわち “the consummated true self”¹, あるいはさらに何か漠然とした希望で終わっている。すなわち, “At the end of Sons and Lovers a man is born; at the end of The Rainbow a woman”²。その男と女が出会って結婚するのが Women in Love である。

「ロレンスが一生をかけて求めていたものは、人と人との結びつきであった。」³ そしてそれが個々の人間の生きることの意味、人生成就の手段だと考えた。またその人と人との関係のなかでも、ロレンスにとって最も重要なのは男女の関係であった。ロレンスは男女の関係について、手紙の中で次のようなことを述べている。

I can only write what I feel pretty strongly about : and that, at present, is the relation between men and women. After all, it is the problem of today, the establishment of a new relation, or the readjustment of the old one, between men and women.⁴

... Because the source of all life and knowledge is in man and woman, and the source of all living is in the interchange and the meeting and mingling of these two: man-life and woman-life, man-knowledge and woman-knowledge, man-being and woman-being.

Which is a sermon on a stool.⁵

Sons and Lovers で誕生した男は、Women in Love では Rupert Birkin すなわちロレンス自身を表わしており、人生の目的は生きること自体であり、女性との愛が生活の核心だと考え、両性の対立・闘争、エゴイズムの対立の最も著しくみられる恋愛関係、結婚の場面で理想境を説き、それを求めて共に進んでゆくにふさかしい女性 Ursula に出会う。Hermione, Gudrun, Ursula 三人の女性を登場させ、対照させながら、Ursula を理想境の伴侶にふさわしく誘導してゆく。本論では、現代の予言者といわれるロレンスがいったいどんな両性関係の理想状態を現代の機械文明の社会に生きる人間の中に追求しようとしたのかを、Women in Love に描かれた両性関係の諸相の中で論じ、そうした中で三人の女性 Hermione, Gudrun, Ursula を研究してゆくことによって、ロレンスの考えた女性の本質、両性関係の本質を解明してゆきたい。

ここでちょっと、ロレンスの Women in Love に至るまでの主な小説である Sons and Lovers, The Rainbow をも含めて、そこに現われた主人公たる男女を一括してふり返ってみたい。先ず男性の側であるが、Sons and Lovers の Paul, The Rainbow の Tom, Will, Anton そして Women in Love の Rupert, Gerald, これらは各々の境遇、各々の思想、またその場その場にに応じて年令の相違はあるが、とらえ方に根本的・本質的な変化はみられない。これに対して Women in Love に出てくる三人の女性 Hermione, Gudrun, Ursula はいずれも The Rainbow に描かれたような、いわゆる伝統的な女性のイメージを脱している。Sons and Lovers では、子をそして男を産み育てる役割・母親としての女性の印象が強く、The Rainbow では子を産む女、母性・大地なる母としての女の強さが印象づけられているが、Women in Love ではこうした女の姿はぐっと後退してしまう。母親・母性の役割を忘れてしまった Gerald の母親という形で表わされ、以後このような女の姿は強調されることなく、姿を消してゆく。The Rainbow において誕生させた、両性関係の理想的境地を求めてゆくに値する、知性ある、強い自我を持つ、自由 (“the possibility of living fully and satisfactorily”)⁶ を求める女の姿を、より定着させている。より純粋に男女関係を追求するためには、より完全な個人である女が必要であって、そのための子供は必要としないのである。性においても生活・生存への役割といったもの、genital relationship を放棄して、人間の肉体と魂の解放・自発性を求めるのである。

The Rainbow で誕生した女 Ursula は、経済的、社会的独立を目指し、母性に束縛されてしまわない、独立した一個の人間である、といかにも解放された現代女性のごとくに響くのであるが、婦人参政権論者 Maggie との議論にみられるように、感覚的あるいは本能的な人間の魂の解放といったものであって、政治的活動などには興味を示さない。ロレンスを取巻く多くの女性が進んだ考えの持ち主であり、Sons and Lovers の Clara のような運動家もあつたにもかかわらず、婦人参政権論者のような女性は、Sons and Lovers では主要な女性の一人であつたが、The Rainbow では Ursula の友人 Maggie として脇役で登場し、それ以後は全くみられなくなってしまう。結局「西洋一般の男の理想は、彼の支配に自由意思から服従する、議論なしに彼の思想をうけいれることはないが、けっきょくは彼の道理に服する、つまり知性で彼と抵抗するが、けっきょく説きふせられるそういった女性である。」⁷ といった女性観にとどまる。さらに進んで “the defeat of feminism”⁸ をみることができ、それと同時に “man to man”, “male power” をのぞかせてくる。Women in Love では、The Rainbow で一通りの苦難と経験を経て、挫折の後に、何かを (“true self”) を求めて、まだ目覚めてはいない女 Ursula に Birkin すなわちロレンス自身が、愛の哲学・理想を説いてゆくのであ

る。またそれと並行して、Hermione のような自分の意思を押しつけようとする知識人ぶった女性を否定し、男が女に母性的な本質を求めて頼ろうとするような関係 (Gerald と Gudrun) では、女は男を破滅に追いやることを描く。ここにロレンスが絶えず心の奥底で恐怖を感じ、なんとかして押しのけようとした “possessive and dominant women” という女性観をうかがうことができる。

- 注1 Harry T. Moore, The Intelligent Heart, The Study of D. H. Lawrence, (London: Heinemann, 1930), p. 196. Moore は “The Crown” について述べている中で, “the crown” すなわち “the consummated true self” とすると同時に, “The iris, or rainbow, also symbolized this true self, which, could be created only after the individual had fulfilled the possibilities of the warring extremes of his own nature, the suffering that came from the dark side and the joy that came from the light.” と言及している。
- 2 Mark Spilka, The Love Ethic of D. H. Lawrence (Bloomington: Indiana University Press, 1955), p. 121.
- 3 中橋一夫, 「ロレンス」研究社, 1965, p. 1.
- 4 Harry T. Moore ed. The Collected Letters of D. H. Lawrence, (London: Heinemann, 1970), I, p. 200.
- 5 Ibid., . 280.
- 6 Helen Corke. D. H. Lawrence The Croydon Years, (Austin: University of Texas Press, 1965), p. 77. また Diana Trilling ed. The Portable D. H. Lawrence, (New York: The Viking Press, 1975), p. 29, “It is never freedom till you find something you really positively want to be.”
- 7 ボーヴォワール, 生島遼一訳, 「第二の性V—文学に現われた女」新潮社, 1955, p. 76.
- 8 R. P. Draper, “The Defeat of Feminism: D. H. Lawrence’s The Fox and ‘The Woman Who Rode Away,’” Studies in Short Fictions, vol. 3, no. 2, (Newsberry: Newsberry College, 1966), p. 186. “The Fox and ‘The Woman Who Rode Away,’ tales about the defeat of woman’s independence, are part of Lawrence’s answer to the suffragettes.”

II

こうしたロレンスの「支配的人間」という女性観は、彼にまつわるあるいはロレンスの関心を引いた女性との関係といった方がいい、女性たちを思い浮かべてみる時、いかにも納得のゆくところである。先ずロレンスの母親は Sons and Lovers に描かれた Mrs. Morel に見られるごとく、真にそうである。夫を支配し自分の望むタイプに仕立てあげようとしてもどうにもならず、代って息子たちそしてロレンスを自分の思いのままに、理想的な男にしようとする。ロレンスの初恋の人 Jessie Chambers は Miriam として母親と同タイプの、同様に Paul を支配しようとする女性としてとらえられ、またロレンスにまつわる三人の女性の合成による女といわれる Clara は婦選論者であり、男を自分の手の中に入れることを求めてくるが、Paul では失敗して、結局夫の元に帰る。Sons and Lovers のこれら三人の女性は各々に異った面を持ってはいるが、いずれも Paul の成長に必要な物として存在し、やがて Paul にとっては自分を支配しよう、我が物にしようとする人間と映るようになり、そのいずれの支配からも逃れて、新しい方向に向かってゆく。

そして、ロレンスという作家に一大飛躍をもたらした女 Frieda こそ、肉体的にも、精神的

にも「支配的人間」そのもので、ロレンス生涯の闘争相手であった。その後のロレンスの女性観の根源をなすものであり、ロレンスの描く両性関係の願望の世界の動機・要因となっている。そのうえ、Frieda の姉 Else は当事最先端をゆく女性であり、ロレンスがこの人に The Rainbow を献呈していることからして、ロレンスは Else に多大の関心を持ち、信頼をよせていたことが窺える。Else が当時のドイツ思想界の先端に係わる女性であったなら、Ottoline Morrell もまた当時の英国における作家や芸術家のホステス役として、並はずれた勇気ある女性であった。ロレンスはこの女性を通して、当時の知的社会に紹介され、大いに影響を受けた。彼女の夫は下院議員であり平和論者であって、Morrell 夫妻の邸宅は文学者、芸術家、平和論者の溜場となった。Ottoline はこの知的社会の一種のパトロン的な役割を演じており、ロレンスはある時期 Ottoline に大いに傾倒していた。ところが Ottoline をモデルにしたといわれる Hermione に「愛している振りをしながら支配しようとする女性である。彼女は第二のモレル夫人であるといつてよい。・・・ハーマイオニのなかにロレンスは、産み、愛し、ついには殺すという三重の役を演じる〈偉大な母〉 (Magna Mater) のイメージを見る。」¹

その他にも、The Trespasser を書かせることになった、クロイドン時代の友人 Helen Corke、そして Alice Dax や後に Mabel Dodge 等、ロレンスが関心をよせた女性には、ロレンスの恐れる支配しようとする人間のイメージに連なるタイプが多く、こうした女性観は終生ロレンスの脳裡を離れず、絶えず恐怖感を与えた。従っていずれの作品にも多かれ少なかれ顔をのぞけ、ロレンスの両性関係の原点をなしていると考えられる。また逆のタイプで、ただしたむきに尽した女性 (Viola Meynell, Dorothy Brett)、結婚まで考えたが、結局なんとも物足りなかった女性 (Agnes Holt, Louie Burrows)。同じように知的で高貴な婦人であったが、Lady Ottoline Morrell とはかなり対照的な Lady Cynthia Asquithこそ “a kind of ideally worshiped dream woman” であったのか。しかしこうしたロレンスにまつわる女性については、次の段階に進む前にどうしても研究・分析してみなければならないので、稿を新たに詳しく論じてみたいと考えている。従ってここではこれくらいに止めておこう。

Women in Love においては、男女の理想的な状態「星の均衡」を追求してゆくために、支配しようとする女性を拒絶し、女に母性的支配を求めた男を破滅に至らしめ、また愛を御旗に自我を押しつけてこようとする女に、そのような自我を捨てさせようと必死に闘うのである。以上述べてきたようなロレンスの女性観に基づき、それではどのような両性関係の理想を求めたのであろうか。愛の哲学の確立を試みた小説といえる Women in Love を分析してゆく前に、ロレンスの説く恋愛観・両性関係の理想境についていまいし論じてみたい。

The Studies in Classic American Literature において Edgar Allan Poe について論じている中で、ロレンスの “love” への見解を窺い知ることができる。ロレンスによれば Poe は “the ecstasies of extreme spiritual love” を最高のものとして求めたとし、 “battle of wills between the lovers” “Love is become a battle of wills.”² といひ、さらに次のように説いている。

It is easy to see why each man kills the thing he loves. To know a living thing is to kill it. You have to kill a thing to know it satisfactorily. For this reason, the desirous consciousness, the SPIRIT, is a vampire.

One should be sufficiently intelligent and interested to know a good

deal about any person one comes into close contact with. About her.
Or about him.

But to try to know any living being is to try to suck the life out of that being.

Above all things, with the woman one loves. Every sacred instinct teaches one that one must leave her unknown. You know your woman darkly, in the blood. To try to know her mentally is to try to kill her. Beware, oh woman, of the man who wants to find out what you are. And, oh men, beware a thousand times more of the woman who wants to know you, or get you, what you are.

It is the temptation of a vampire fiend, is this knowledge.³

そして Poe の場合は、Poe が知ことを欲しているのであり、ここでは Ligeia のことを “But she wanted to be vamped. She wanted to be probed by his consciousness, to be KNOWN.”⁴ と評して、Poe の凄まじい、気味の悪いような物語を “love” ストーリーだと称している。ロレンスとしては “Nowadays it is usually the man who wants to be KNOWN.”⁵ だというのだ。ロレンスはこのような愛、両性関係、人間関係すなわち “KNOW” あるいは “be KNOWN” ということには抵抗し、否定する。あまりに知性的、精神的なものに走り過ぎている近代文明の中で、ロレンスは、既製概念を捨てた、人間のもっと本質的なもの、もっと自然な姿、感覚的あるいは肉体的なものを取り戻さねばならないことを説く。血の交流、肉の交流、さらに自然・宇宙との交感を主張する。このようなロレンスの主張を “Reflection of the Death of a Porcupine” の中にありありと見ることができる。全自然界、宇宙の中で万物の生命、生命力、生存がとらえられる。

No man, or creature, or race can have vivid vitality unless it be moving towards a blossoming: and the most powerful is that which moves towards the as-yet-unknown blossom.

Blossoming means the establishing of a pure new relationship with all the cosmos. This is the state of heaven. And it is the state of a flower, a cobra, a jenny-wren in spring, a man when he knows himself royal and crowned with the sun, with his feet gripping the core of the earth.⁶

こうした思想が両性関係の理想境追求の根底に流れながら、 “The best way is a pure relationship, which includes the being on each side, and which allows the transfer to take place in a living flow, enhancing the life in both beings”⁷ を人間と人間の間求め、男と女の関係すなわち恋愛や結婚の場面においては “star-equilibrium” として説かれる。星が各々極性を持ちつつ、互に均衡し合っているように、男女どちらも各々完全な存在でありながら、両極をなして互に均衡し合わなければならないという。

注1 倉持三郎、「D. H. ロレンス—小説の研究」荒竹書店、1976、p. 21.

- 2 (London: Heinemann, 1964), p. 65.
- 3 Ibid., p. 66.
- 4 Ibid., p. 67.
- 5 Ibid.
- 6 D. H. Lawrence, Selected Essays (Penguin, 1965), p. 69. この後さらに “There will be conquest, always. But the aim of conquest is a perfect relation of conquerors with conquered, for a new blossoming. Freedom is illusory. Sacrifice is illusory. Almightyness is illusory. Freedom, sacrifice, almighty, these are all human side-tracks, cul-de-sacs, bunk. All that is real is the overwhelmingness of a new inspirational command, a new relationship with all things.”
- 7 Ibid., p. 66.

III

ボーヴォワールは「第二の性」Ⅲのいみじくも「恋する女」と題した章の中で、「真正の愛 (amour authentique) は二つの自由が互いに相手を認めることの上にうちたてられねばなるまい。そのときには両方の恋人がお互いを自分自身として他者として経験しあい、どちらも超越を放棄することなく、またどちらも自己を不具にすることなく、相たずさえて世界のうちに価値と目的を発見するだろう。両方にとって、恋愛は、自己を与えることによって自分自身を啓示し、世界をゆたかにする行為にあるであろう。」¹ と述べている。

ロレンスもまた Women in Love において恋愛の発生と結実を扱うことによって、結婚を主題としている。すなわち両性関係 “relationship between man and woman, husband and wife” の理想追求をしてゆく。従って、先ず冒頭 (第1章 Sisters) から、Ursula と Gudrun によって、この作品の中心題目である結婚について議論される。Gudrun が結婚というものについて Ursula に問いかける。Gudrun は結婚について “one needs the experience of having been married”, “it need be an experience” と考えているのに対して、Ursula は “More likely to be the end of experience.” と述べ、結婚というものについて未知数というか、まだはっきりと目覚めてない、待望の中にいるといった感じで登場してくる。そしてこの後二人は Crich 家の娘の結婚式を見に教会へ行き、そこでこの小説の主要人物たち、Hermione, Gerald, Birkin が二人の目を通して紹介され²、さらに Birkin と Hermione の関係の本質が説明され、そして次の第2章では Shortlands 邸での結婚披露宴を舞台にして、Birkin と Gerald の二人の男が対照的³ に描き出される。このようにして、前作 Sons and Lovers や The Rainbow の冒頭とは異なり、最初の1, 2章で重要人物がすべて紹介され、すぐさま主題の提起がなされ、鮮やかな始り方である。

Women in Love はこのようにして始り、第3章以降 Sons and Lovers で生れた男 Birkin による人生の目的、両性関係の理想解明へと展開してゆく。その過程は Gerald と Birkin を二つの異ったタイプの男性として対照しつつ、これら二人の男との関係において、三人の女性を描くことによって運ばれてゆく。こうした五人の男女の中で、Hermione と Gerald には終始ははっきりとしたイメージが与えられていて、変化や進歩のない固定した人物である。Ursula と Gudrun は教育もあり、社会的にも独立した女性であって、十分用意ができていたが、何のために生きるのかという題目にたいしてまだこれから目覚めてゆく存在として登場し⁴、Gudrun は Gerald をとおして、Ursula は Birkin をとおして何かに向かいだし、生きるこ

との核心を追求し始める。そして Birkin すなわちロレンスはこれらすべてを批判し、判断を下しつつ、生きることの意味、理想をさぐり求めてゆく。

Gerald という炭坑経営者をとおして、人間性、個性を否定してしまう資本主義、物質主義、機械主義を批難する。従って Gerald は冷い北方のイメージであり、"whiteness", "snow" で表わされ、踏切に列車が通りかかった際、列車に驚いて退こうとする馬の扱い方に、生き物を生命を持った存在として考えないで、一つの道具とする彼の態度をみることができる。さらに第17章 The Industrial Magnate では、こうした Gerald の姿が克明に描き出される。すべては生産を上げるための道具である、人間もまた道具である。従って自分自身についても "Gerald himself, who was responsible for all this industry, was he a good director? If he were, he had fulfilled his life. The rest was byplay." (p. 251) となる。そしてそのためには、人間の意志がすべてを決する要因となる。

... The will of man was the determining factor. Man was the arch-god of earth. His mind was obedient to serve his will. Man's will was the absolute, the only absolute.

And it was his will to subjugate Matter to his own ends. The subjugation itself was the point, the fight was the be-all, the fruits of victory were mere results. It was not for the sake of money that Gerald took over the mines. He did not care about money, fundamentally. He was neither ostentatious nor luxurious, neither did he care about social position, not finally. What he wanted was the pure fulfillment of his own will in the struggle with the natural condition. (pp. 251-252)

こうして人間性を無視した、生産を上げるための徹底した機械主義、組織化をおし進めた時、それは人間の存在を否定することになり、Gerald の死を意味するものとなる。"The whole system was now so perfect that Gerald was hardly necessary any more." (p. 261)

このような Gerald とは全く異った考えを持った Birkin だが、二人の間には不思議な友情が存在し、お互いに魅力を感じている。Birkin はこのような Gerald との議論の中で何のために生きるのかと問いかけ、生きること自体が人生であり、機械文明の社会での人間の生きられる道を探り、男と女の結びつきの重要性、それしかこの世に生きる道はないと主張する。そしてまた男と女の結びつきに加えて、男と男の結びつきの必要を説き、血の盟約をとり交わそうと提案する。しかし Gerald は Birkin との強い絆を感じながらも、納得がゆかず、この提案を断わる。真の自我を持たない Gerald は堪えがたい孤独を感じ "He had found his most satisfactory relief in women." (p. 263) でありながら、踏切での馬や、Rabbit の章でみられると同様、女をもまた一つの道具、自分の意志で使用する物だと考えており、興味を持ち続けることができず "He didn't care about any more." (p. 263) の状態になる。その Gerald が父親の死に際し、全くの虚無感におそわれた時、自分を支えてくれるのは Gudrun だけだと気づく。Gudrun の寝室に忍び込んで一夜を過した時、Gudrun は Gerald にとって Magna Mater (偉大な母) となり死の淵から蘇らせてくれる。

And she, she was the great bath of life, he worshipped her. Mother and substance of all life she was. And he, child and man, received of her and was made whole. His pure body was almost killed. But the miraculous, soft effluence of her breast suffused over him, over his seared, damaged brain, like a healing lymph, like a soft, soothing flow of life itself, perfect as if he were bathed in the womb again. (p. 389)

しかしロレンスによれば、両性関係において、男が女性の中にこのような母性的本質を求めてゆく時、それは男性に対して絶対的な支配を持つことになり、男を破滅に追いやることになるというのである。また Gerald が踏切で馬を扱う場面や Rabbit の章でうさぎを扱う場面に対する Gudrun の反応にみられるごとく、Gudrun は最初は、Gerald が炭坑を支配するように自分を支配してくれることを期待していたが、父親の死後頼れる母性を求めてくる Gerald に失望を感じ、やがて拒否するようになる。女の傍にいななければならない Gerald は、またもや自己の空しさを感じ、腹を立て、女を殺すか、自分が死ぬよりほかない破目に行き着く。この点について Spilka は The Love Ethic of D. H. Lawrence の中で次のように述べている。

As we know, this childishness in love, this terrible dependency upon Gudrun Brangwen, begins with Gerald's failure to find organic purpose in the man's world, in the very area of his supposed strength. And there is the gist of Lawrence's sharpest criticism of the industrialist, per se: not that he remains a child in love, but that he lacks all purposive being to begin with, in the world at large, and therefore becomes a child in love. Like Skrebensky in The Rainbow, Crich fails to lead "on any side" into the unknown; he finds "life" only to lose it, because his life is pointless, and therein lies the poignancy of his death,⁵

次に Hermione であるが、終始知性を誇り、愛という仮装の下で男を所有し、支配し、自分の意のままにしようとする女性の典型として描かれている。ロレンスの女性に対する、支配的人間というイメージとして鮮かに描き出され、男にとってたまらない存在であり、Birkinによって残酷なまでに抗撃され、結局逃げられてしまう。Hermione は "Yes, it is the greatest thing in life — to know. It is really to be happy, to be free." といひまた "If only we could learn how to use our will, we could do anything. The will can cure anything, and put anything right. That I am convinced of — if only we use the will properly, intelligibly." (p. 95) ともいう。Leavis は Hermione について次のように評する。

Her love of "knowledge" is the desperate sense of insufficiency that determines also her attachment to Birkin — makes him, that is, so terribly necessary to her; and the sense of insufficiency is indis-

tinguishable from the relaxed insistence of her will.⁶

第8章 Breadalby では、Birkin が彼女の支配しようとする意志に反抗するので、彼女は怒って、文鎮で Birkin の頭をなぐるという事件が起るが、Hermione も Birkin について次の様に考えており、

And then she realized that his presence was the wall, his presence was destroying her. Unless she could break out, she must die most fearfully, walled up in horror. And he was the wall. She must break down the wall — she must break him down before her, the awful obstruction of him who obstructed her life to the last. It must be done, or she must perish most horribly. (p. 117)

結局 Birkin と Hermione のような両性関係は存続しえないのである。この出来事の後 Birkin は森の中へ逃げだし、裸になって草木と触れあうことによって慰められるのを感じる。こうして Birkin は Hermione から逃れようとする一方、なにかもっと本質的な結びつきを模索しており、Ursula の中にそうした相手とするにふさわしい何ものかがあることに気づいている。

And Birkin, watching like a hermit crab from its hole, had seen the brilliant frustration and helplessness of Ursula. She was rich, full of dangerous power. She was like a strange unconscious bud of powerful womanhood. He was unconsciously drawn to her. She was his future. (p. 102)

注1 生島遼一郎訳，新潮社，1955，pp. 120-21.

2 D. H. Lawrence, *Women in Love* (Penguin, 1937), p. 15. Gerald—There was something northern about him that magnetized her. In this dear northern flesh and his fair hair was a glisten like sunshine refracted through crystals of ice. And he looked so new, unbroached, pure as an arctic thing.

作品からの引用はすべて上記のもので、以下引用の後にページ数のみ示す。

Hermione—But she was a man's woman, it was the manly world that held her. (p. 17) But still she believed in her strength to keep him, she believed in her own higher knowledge. (p. 18)

3 Birkin が全体や国家よりも先に個人を考え、人為的なものよりも自然なものを求め、秩序や対面よりも自然に発する行為を重んずるのは対照的に、Gerald は国家、組織を考え、人為的、社会秩序・対面を重んずる。

4 第1章において、Ursula が妹 Gudrun に何故家に帰って来たのかという問に対して Gudrun は "I have asked myself a thousand times.", "I think my coming back home was just reculer pour mieux sauter." と答えている。また第4章の最後の行りに "Ursula often wondered what else she waited for, besides the beginning and end of the school week, and the beginning and end of the holidays. This was a whole life! Sometimes she had periods of tigth horror, when it seemed to her that her life would pass away

and be gone, without having been more than this. But she never really accepted it. Her spirit was active, her life like a shoot that is growing steadily, but which has not yet come above ground." (p. 56)

5 *op. cit.* pp. 138-9.

6 F. R. Leavis, *D. H. Lawrence, Novelist* (New York: Knopf, 1955), p. 227.

IV

それでは次に、Birkin すなわちロレンスは Ursula を "She was his future." と定めて、いったいどんな男女関係の理想を説き、求めていったのかみてゆきたい。第11章 An Island において Birkin は先ず常識的な意味での愛を否定する。

"I don't believe in love at all—that is, any more than I believe in hate, or in grief. Love is one of the emotions like all the others—and so it is all right whilst you feel it. But I can't see how it becomes an absolute. It is just part of human relationships, no more. And it is only part of any human relationship. And why one should be required always to feel it, any more than one always feels sorrow or distant joy, I cannot conceive. Love isn't a desideratum — it is an emotion you feel or you don't feel, according to circumstance." (p. 143)

Birkin は愛の無常を説き、それ以上のものを求めている。彼にもまだよく分からないがこれを "freedom together" という。次の Mino の章ではこれをさらに Ursula に分からせようとするが、彼女にはなかなか理解されず、Birkin は自分を愛していないのだと言い張る。Birkin は "There is a real impersonal me, that is beyond love, beyond any emotional relationship. So it is with you." (p. 161) といい、ロレンス独自の愛の哲学 "star-equilibrium" を "two single equal stars balanced in conjunction." (p.168) "an equilibrium, a pure balance of two single beings: — as the stars balance each other" (p.164), "But it is not selfless — it is a maintaining of the self in mystic balance and integrity — like a star balanced with another star." (p. 170) と説明する。ロレンスにおける恋愛とは、「男も女も、少しも自我を放棄することなく、しかも相手と完全に相融ける、という一見不可能のことへの企求」である。¹ またこの章では牡猫と牝猫の場面があるが、Birkin は牡猫は牝猫を指導してやらなければならないというのに対して Ursula は牡猫が牝猫をいじめ、自分に従わせようとしているのだと反撥する。これは、ロレンスが理想を説き、男女の対等を主張しているながら、実は男性優位と、力による服従の意識をその根底に秘め持っていることをのぞかせている。後に書かれた "Give Her a Pattern" という随筆では、ロレンスのこうした女性観が如実に表わされている。Ursula が Birkin によって目覚めさせられ、導かれるのを待っているごとく、この随筆では女は男によってパターンを与えられるのを待っている。パターンなしでは存在し得ないと述べている。しかしこの場面では、Ursula の主張 (We can only love each other. Say "my love" to me, say it, say it.) に屈し、また彼

女に惹きつけられて、常套の意味での愛が確められる。そして Birkin のいう “one of emotions”, “an emotion you feel or you don’t feel, according to circumstance” にひたる。こうしたところに、古い自我と新しい自我との間で矛盾、苦悩している Birkin の姿をみることができる。古い自我はまだ男女関係に情欲を求め、それに満足するが、これは破壊へと通じるものである。もう一つの新しい自我は、男女関係に従来の情欲を否定する自我であり、新しい理想を探し求めるものである。

従って、Birkin は自分が理想とする男女関係を Ursula と共に築こうとするならば、先ず Ursula の中にもみられる (Hermione だけでなく) 女性の支配的な自我や本質の面を打ち砕かなければならない。この点について Leavis も “In Ursula, Birkin finds something to be fought before the hope of a permanent relation can be assured — something he calls the Magna Mater.”² と述べており、第19章 Moony において、男性を支配しようとする女性の姿は月によって象徴され、Birkin は水面に映る月影に石を投げつけて、壊すが、月影はまた現われる。そこへ Ursula が現われ二人のやりとりとなる。ロレンスの求める理想的境地はなかなか分りにくいものであり、盛んに “love” を主張する Ursula にも分らせることが困難である。Birkin は苛立つが、Halliday の部屋で見たアフリカ土人の彫刻に表わされているような官能の世界に満足することはできない。また Gerald に思いをめぐらすと、 “whiteness”, “snow”, “frost knowledge” で表現されるような精神的文明に走ることもできないと思う。 “something deeper, darker, than ordinary life could give” を求め、Ursula との次のような会話となる。

“You think, don’t you,” she said slowly, “that I only want physical things? It isn’t true. I want you to serve my spirit.”

“I know you do. I know you don’t want physical thing by themselves. But, I want you to give me—to give your spirit to me—that golden light which is you — which you don’t know — give it me —”

After a moment’s silence she replied :

“But how can I, you don’t love me! You only want your own ends. You don’t want to serve me, and yet you want me to serve you. It is so one-sided !”

It was a great effort to him to maintain this conversation, and to press for the thing he wanted from her, the surrender of her spirit.
(p. 281)

“No,” he said, outspoken with anger. “I want you to drop your assertive will, your frightened apprehensive self-insistence, that is what I want. I want you to trust yourself so implicitly that you can let yourself go.” (p. 283)

“I don’t mean let yourself go in the Dionysic ecstatic way,” he said. “I know you can do that. But I hate ecstasy, Dionysic or any other. It’s like going round in a squirrel cage. I want you not to care about

yourself, just to be there and not to care about yourself, not to insist — be glad and sure and indifferent.” (p. 283)

Birkin は Ursula とのこのような状態に耐えられず、自分の考える理想を長々と思いつぐらす。

There was the paradisaical entry into pure, single being, the individual soul taking precedence over love and desire for union, stronger than any pangs of emotion, a lovely state of free proud singleness, which accepted the obligation of the permanent connexion with others, and with the other, submits to the yoke and leash of love, but never forfeits its own proud individual singleness, even while it loves and yields. (p. 287)

そしてこの理想に向かって “sensitive and, delicate, really so marvellously gentle and sensitive” である Ursula と共に進んでゆくより仕方がないと気づく。そして “He must ask her to marry him. They must marry at once, and so make a definite pledge, enter into a definite communion.” (p. 287) と考え Ursula に結婚の申し込みをする。だが結婚の申し込みを受けた後の Ursula が思いつぐらすことの中に、まだまだ二人の間の隔りが大であることがよく分る。

She knew what kind of love, what kind of surrender he wanted. And she was not at all sure that this was the kind of love that she herself wanted. She was not at all sure that it was this mutual union in separateness that she wanted. She wanted unspeakable intimacies. She wanted to have him, utterly, finally to have him as her own, oh, so unspeakably, in intimacy. To drink him down—ah, like a life-draught. (p. 299)

And subtly enough, she knew he would never abandon himself finally to her. He did not believe in final self-abandonment. He said it openly. It was his challenge. She was prepared to fight him for it. For she believed in an absolute surrender to love. She believed that love surpassed the individual. He said the individual was more than love, or than any relationship. For him, the bright, single soul accepted love as one of its conditions, a condition of its own equilibrium. She believed that love was everything. Man must render himself up to her. He must be quaffed to the dregs by her. Let him be her man utterly, and she in return would be his humble slave—whether she wanted it or not. (p. 299)

Birkin はあくまで Ursula の自我に対抗してゆき、Ursula は Ursula で自我を曲げたり、放棄しようとはしない。従って二人はなかなか歩み寄ることができないし、理解し合えないが、ロレンスの理想である “freedom together”, “star-equilibrium”, “polarity” の思想からゆけばこれでよいのであろう。「二人の間に、しばしば闘争が繰返される。しかし、それにも拘らず、あるいは、むしろ、そのために二人は次第に了解に達する。完全な人間関係は、妥協よりもむしろ激しい闘争によって、獲得されるものだ、というのがロレンスの信条である…」³

第23章 *Excuse* は *Women in Love* における、両性関係のこのような境地の頂点を描き出している。Birkin と Ursula は激しく衝突し、Ursula はもらった指環を投げ捨てて離れてゆくが、その後には、平和ないたわりと交わりがやってくる。Birkin は “free together” の理想をまた繰り返し、二人は共に辞職願いを書いて出すことによって、この社会から逃げ出し、理想境探求の彷徨へと出発する。二人は辞職願いを投函した後、Sherwood Forest に行き、衣服をぬぎ捨て、自然の中で、理想境を達成する。それは知性や官能を越えた、もっと宇宙、生命の本質の中での、完全な融け合いであった。

And he too waited in the magical steadfastness of suspense, for her to take this knowledge of him as he had taken it of her. He knew her darkly, with the fullness of dark knowledge. Now she would know him, and he too would be liberated. He would be night-free, like an Egyptian, steadfast in perfectly suspended equilibrium, pure mystic nodality of physical being. They would give each other this star-equilibrium which alone is freedom. (p. 360)

She had her desire of him, she touched, she received the maximum of unspeakable communication in touch, dark, subtle, positively silent, a magnificent gift and give again, a perfect acceptance and yielding, a mystery, the reality of that which can never be known, vital, sensual reality that can never be transmuted into mind content, but remains outside, living body of darkness and silence and subtlety, the mystic body of reality. She had her desire fulfilled. He had his desire fulfilled. For she was to him what he was to her, the immortal magnificence of mystic, palpable, real otherness. (p. 361)

このような Birkin-Ursula の愛の場面と対照的に Gerald-Gudrun の交わりが描かれてゆく。Gerald-Gudrun の間の場面では “at this moment” とか “here” という言葉で表現され、永遠というような観念はなく、また二人の個別性はなく、“So she was away and gone in him, and he was perfected.” といったふうに描かれる。ロレンスは社会的地位や階級を厳然と認める Gerald に対して、若い炭坑夫たちと同じではないか、“Under this bridge, the colliers pressed their lovers to their breast. And now, under the bridge, the master of them all pressed her to himself!” (p. 373) と嘲笑的である。

続いて Birkin は男と女の永遠の融合に加えて、男と男の結びつきの重要性を説く。Birkin は Gerald に言う “You’ve got to take down the love-and-marriage ideal from its

pedestal. We want something broader. I believe in the additional perfect relationship between man and man—additional to marriage. ("pp. 397—8) Kate Millet は "Women in Love presents us with the new man arrived in time to give Ursula her comeuppance and demote her back wifely subjection."⁴ といひ、Birkin を "prophet", "the Son of God" だと称するごとく、Birkin は Ursula を説教してゆく。二人は結婚し、理想とする両性関係、夫婦生活に向う。定住地も家も持たない、束縛されない、二人でいて自由な世界へと。ここで一つ、Birkin のような考えの持主が、何故社会的に結婚という形をとるのであるかという疑問がおこるのであるが、それは、因襲的な結婚という形をとりながら、それを新しい形のもの、両性関係の理想追求の場にしようとしたのであろう。しかし、あるいはそれは、John M. Murry のいうように "To make her subject again, to re-establish his own manhood—this is the secret purpose of Women in Love."⁵ が本音で、ロレンスの自慰的志向なのであろう。これに対して Gerald-Gudrum は結婚という因襲に身を投じて、生涯束縛されることはできないと思う。そして、この作品の終局へ向って、Birkin と Ursula が Birkin の主張する理想的境地に向って進んでゆく暖いものとは、絶えず対照的に、Gerald と Gudrun の冷えてゆく関係、次第に隔りを増してゆく関係が進められる。こうした Birkin と Ursula の関係において、Birkin の次のような考えはどうしても Ursula には理解されず、最後まで説き伏せることができないで残される。

But we want other people with us, . . .

One has a hankering after a sort of further fellowship. I always imagine our being really happy with some few other people — a little freedom with people (p.409)

It's the problem I can't solve. I know I want a perfect and complete relationship with you ; and we've nearly got it — we really have. But beyond that. Do I want a real, ultimate relationship with Gerald? Do I want a final, almost extra-human relationship with him — a relationship in the ultimate of me and him — or don't I ? (pp.409—10)

Ursula を理想的境地を共に追求してゆくにふさわしい女性に仕立て上げてきたのであるが、両性関係をより完全なものにするためには、男と男の結びつきが加えて必要だという段階に至っては、最後まで完全な一致をみることができなかった。Women in Love は Gerald の死に直面して、Birkin と Ursula の次のようなやりとりで終わっている。

"Did you need Gerald?" she asked one evening.

"Yes," he said.

"Aren't I enough for you?" she asked.

"No," he said. "You are enough for me, as far as a woman is concerned. You are all women to me. But I wanted a man friend, as eternal as you and I are eternal."

"Why aren't I enough?" she said. "You are enough for me. I don't

want anybody else but you. Why isn't it the same with you?"

"Having you, I can live all my life without anybody else, any other sheer intimacy. But to make it complete, really happy, I wanted eternal union with a man too: another kind of love," he said.

"I don't believe it," she said. "It's an obstinacy, a theory, a perversity."

"Well —" he said.

"You can't have two kinds of love. Why should you!"

"It seems as if I can't," he said. "Yet I wanted it."

"You can't have it, because it's false, impossible," she said.

"I don't believe that," he answered. (p. 541)

おそらくロレンスは、"Women have the logic of emotion, men have the logic of reason"⁶ と述べていることから推測できるように、女性は男のこうした意味を充分判ってくれないのだとみたのであろう。また、このような結び方をしていることからして、ロレンスが男と男の関係、すなわち "manhood" を築き上げることをいかに重大に考えていたかを知ることができる。

注1 阿部知二編、「ロレンス研究」英宝社、1974、p. 62

2 op. cit. p. 220.

3 村岡勇、「D. H. ロレンス・テーマと研究」研究社、1966、p. 54.

4 Sexual Politics (New York: Avon Books, 1971), p. 347,

5 D. H. Lawrence: Son of Woman, (London: Jonathan Cape, 1954), p. 118.

6 Selected Essays, Give Her a Pattern, op. cit. p. 22.

V

ロレンスは Hermione によって、両性関係において、知性とか愛とか母性とかによって、自分の意志を強く押し出し、男性を自分の好みに仕立て上げ、支配しようとする女性を烈しく抗撃し、否定した。また Gerald-Gudrun によって、両性関係において女性の母性的本質に Magna Mater を求めて、大地なる母・生命の泉として女に寄り掛る男は、相手の女に嫌悪の念をおこさせ、自己の破滅を招くことになることを描いた。そして同時に Birkin (ロレンス) は従来愛といわれるものを否定して、新しい愛の理想的境地を探求し、生きることの意味・目的を説いて、"freedom together", "star equilibrium" と称する理想境を一応 Ursula との間に達成したかにみえるのであるが、男と女の結びつきに加えて、男性同志の結合の重要性、必要性を説きまた求めるにいたる。しかしこの主張は Ursula (女性) には理解されない。The Rainbow では自我 "true self" を求める解放された現代女性を誕生させ、女性への最大の理解をみせたロレンスも、Women in Love では女性への敵意を次第にはっきりとみせるようになる。ロレンスは、女性というのは理性の世界・本質を充分には判ることができない存在だとみなし、これ以後の作品からは判然と男性優位、男性の支配・女性の従属を主張して、奇妙で神秘的な男根の世界を展開してゆく。

Kate Millet は Women in Love についても非常に面白い意見を述べている。

Women in Love is the first of Lawrence's books addressed directly to sexual politics. It resumes the campaign against the modern woman, represented here by Hermione and Gudrun. Ursula shall be saved by becoming Birkin's wife and echo. The other two women are not only damned but the enemy. The portrait of Hermione is probably the most savage personal attack Lawrence ever wrote. She is the new woman as intellectual, a creature to whom both Birkin and the narrator react with almost hysterical hatred, . . .

そして、新しい両性関係とは要するに、女性の人格の否定であり、結婚とは“the taming of the woman”にとどまらず“her extinction”を意味すると極論する。

現実において、ややもすれば妻 Frieda の強烈な自我と、頑強な肉体に飲み込まれそうだったロレンスが、男の自我を保とうと密かに夢見、願って止まなかった世界を「男根のすがたはロレンスその他多くの人にとっては生きいきとした精力と同時に人間的超越を示すものだ。そこで女は寝床の快楽の中に世界の精霊との神秘的な合体を見ることも可能なのである」²と評するのは適切であろう。

注1 op. cit. pp. 347-8.

2 ボーヴォワール, op. cit. 「Ⅲ-自由な女」, p. 36.